出石のまちおこし
～古い町並みを残す但馬の古都～

富山短期大学名誉教授　川中 清司

昔を偲ばせ、郷愁をそそる

出石と書いて「いずし」と呼ぶこの町は、人口一万一〇〇〇人の小さな城下町だが、年に一〇〇万人も観光客が訪れる。

日本海に突き出る丹後半島の付け根、天の橋立と城崎温泉の中間地点にある。古事記や日本書紀にも現れる但馬の古都だ。

六〇〇年前に此隅山に山城が築かれ、四〇〇年前には、東の有子山の裾に小出氏が城を築いた。今、復元したお隅櫓の勇姿がそびえている。

町の人たちは、古い町並みを大事にして、次の時代に残し伝えようとしている。

丸く赤い郵便ポストも、昔のまま町のあちこちにある。昔を偲ばせ郷愁をそそる拠点が、町のあちこちに配置されている。

「うわー、傘の看板が昔のままだねー」

視察メンバーの藤田武司さんが、傘屋の古い看板を見て目を丸くした。二〇年前に来たときそのままと言う。コウモリ傘と番傘を組み合わせた単純なデザインだが、それが何とも言えない懐かしさをにじみ出す。

その向こうに、造り酒屋の赤土の土蔵も、朽ちかけたような姿でそのままに残っている。

白壁づくりで景観を合わせる

大橋のたもとには「おりゅう灯籠」がある。昔は、日本海から三十石クラスの大船が出入りした船着き場で、両岸には蔵屋敷や塩蔵が軒を連ねて並んでいた。

今も、川辺には白鷺が遊び、柳の枝が優しく灯籠を撫でている。その辺りには、永沢出石窯店などの家並みが美しく、但馬信用金庫や交番まで白壁づくりで景観を合わせている。

町なかから「辰鼓楼」が見える。辰の刻（午前8時）には藩士に登城を告げた

沢庵禅師が再興した宗鏡寺（すきょうじ）には、禅師が作った庭園がある。家老屋敷、町立の資料館など探索する人々に距離を感じさせない。こうした町内の見所を説明しながら回ってくれる人力車もある。

毎日、辰の刻（午前八時）になると藩士に登城を告げる太鼓を打ち鳴らした。その櫓は「辰鼓（しんこ）楼」と呼ばれ、今も堀端に勇壮な姿を誇り、町のシンボルとなっている。明治以来、大きな時計が据えられ時を刻んでいる。

町を活かし、そばに生きる

そば屋が五〇軒もある。町中そば屋だらけといった感じだ。それでいて、みんなうまく商売が成り立っているから不思議だ。

出石の藩主、仙石公が長野の上田から国替えになったとき、信州そばが一緒についてきた。それが「皿そば」の始まりで、今では名物となって育っている。挽きたて、打ちたて、ゆがきたての「三たて」が誇り。

「そば藤」の二階の八〇畳の広間で昼飯を食べる。出石焼きの白い小皿五枚に盛られたゆでそばを、

ネギと削りかつおでダシをつけて食べる。淡泊で、ほのかなそばの香りが良い。簡単なお菜がつく。餅米まじりのおにぎり、いかうに、人参とこんにゃくの煮付け、昆布巻き。素朴で旨い。

よくはやる。次々と団体客が入ってくる。大阪の竹材商組合の一四人、京都の木津から来た還暦の婦人グループが三二人、いずれも昨夜は城崎温泉に泊まった帰りコースにここへ立ち寄ったと言う。

菓子づくりにも、フルにそばを活かしている。そば餅一五個四二〇円、そばクッキー三〇個八四〇円、そば羊かん五三〇円、そばひねり餅二一個一〇五〇円、そば饅頭一五個八〇〇円、黒糖胡麻くろぼー（おこしを棒にしたもの）一五本三二〇円、そばころ餅一二個六三〇円。

ほかにも、そばかりんとう、出石そばぼうろなど、ざっと数えただけで一六種類はある。

本命のそばのほかに、黒豆も有名だ。店先に黒々として、つやの良い生の豆が並んでいる。煮豆、炒り豆、納豆など、どれもいける。

町を活かし、そばに生きる。そんな商売人の生きざまが感じ取られる。

古里回帰志向が追風に

この町にはスーパーもコンビニもない。鉄道からも遠く、高速道路からも離れているため、物流が悪く、チェーン展開が利に合わないからだ。

世の中、何が幸いするか分からない。明治に鉄道ができたころ、反対したため、山陰線はここは通らず、世の中の流れから取り残された形となった。ＪＲの駅もなく、駅前商店街もない。ところが、昭和五〇年ころからの、古里回帰志向で見直されてきた。城崎、天の橋立と国鉄の周遊指定をうけ、観光客が増えだした。高速道路からも遠い。それでコンビニなどの物流から外れ、スーパーのフランチャイズも出にくい。そういう立地の条件が、地元小売店にとってプラスに働いている。

不便な立地条件が地元小売店にとってプラスに働く

近隣市町が等距離にあり、通勤しやすく、住居地域に適している。とは言っても、観光以外の小売り環境は必ずしも良くない。耐久消費財や衣料品の購買は、町外の大型店に流れている。豊岡市に二つ、福知山市と八鹿町にそれぞれ一つ、大型店が出石町を取り巻いている。

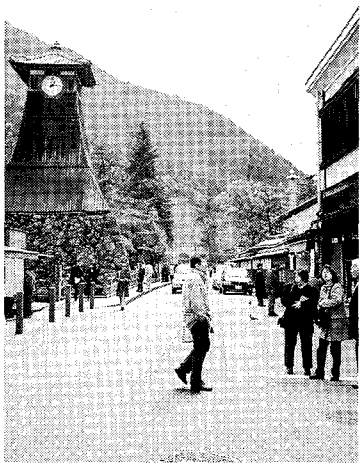
町と商業の活性化のために

行政と商工会が町と商業の活性化のために、①旧城下町の再生計画（一九九二年）、②谷山川の修復、③地域住宅計画の推進、つまり、ウナギの寝床から、どのように居住性を確保するか、といった課題に取り組んできた。

商店街の空き店舗を埋めて、テナントミックス機能を高め、ギャラリーや休憩所を整備し、空き家を利用した市街型ペンション〝歩いて楽しい空間〟を演出していく。

平成一〇年六月に、株式会社出石まちづくり公社ができた。第三セクターで資本金五〇〇〇万円の半分は、出石町が出し、商工会が三〇〇万円。株主は一六七人も集まり町中が協力した。町立の武家屋敷資料館や、直営の売店・喫茶・そば茶屋などの事業を観光協会から引き継いだ。

「びっ蔵」という共同店舗を作り七店が入っている。ファーストフードや農産物を扱う「道しるべ」、飲食の「味よし」、カバンの「Ｒｕｚｏ」、藤や竹製品の「夢ごころ」、草木染めの店など、観光みやげから離れた工夫の店が並んでいる。公社は「出石町の将来を展望したまちづくりに貢献する」目標に向かって、着実に歩み続けている。


年間100万人の観光客が訪れる